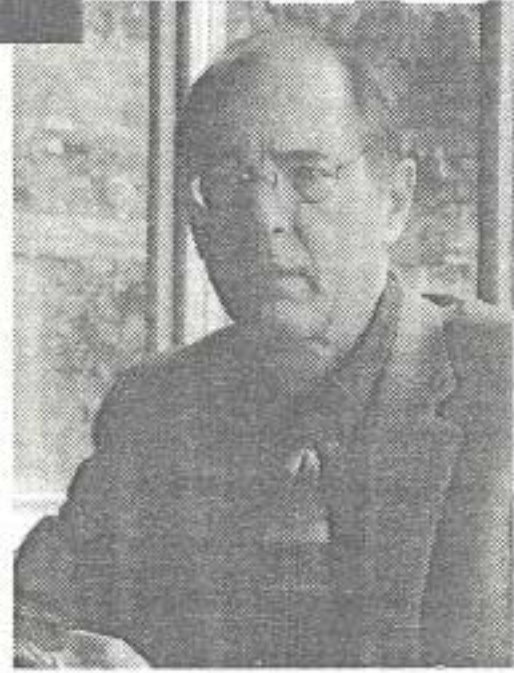


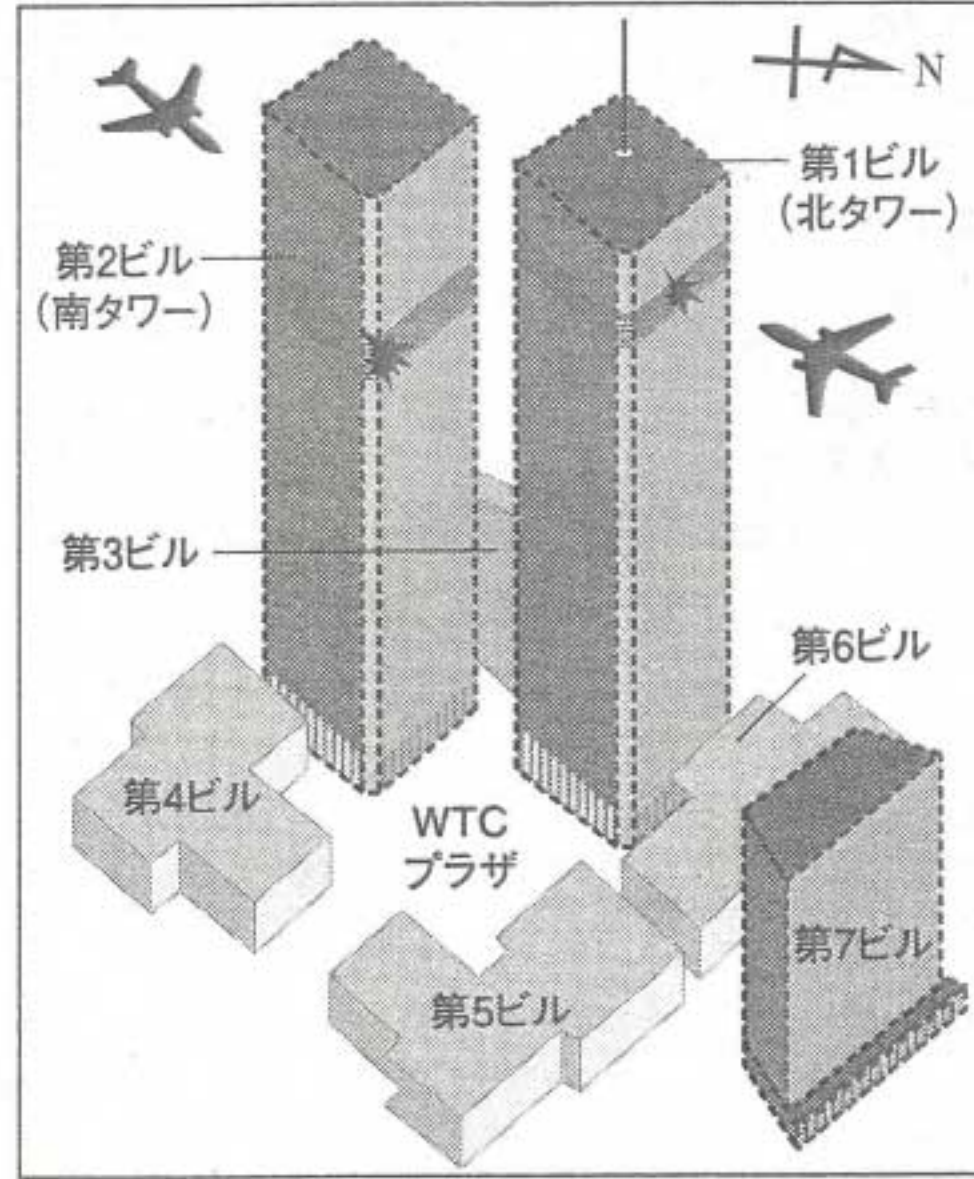
# 世界貿易センター「WTCビルは爆

# 破解体された」



のときに現れる特徴が数多く見られたという。つまり、旅客機の衝突による火災が原因で崩壊したのではなく、何者かによって、あらかじめ爆発物が仕掛けられていたのではないかとこのだ。

ゲイジ氏は06年にWTC崩壊の過程に疑問を抱き、



(FEMA報告書から)

非営利団体「9・11の真実を求める建築家とエンジニアたち(AE911 Truth)」(※2)を立ち上げた。

強制力を持った組織による9・11事件の再調査を、アメリカ政府や議会に求め、ウェブ上で国内外の建築家やエンジニアに署名を呼びかけている。日本も含めてすでに千人前後の賛同者がいるという。

ゲイジ氏の言う「証拠」とは、なんなのか。

「子どもにでもわかる証拠は、三つのビルがほぼ自由落下に近い速度で崩れ落ち

## 世界貿易センター(WTC)ビルの崩壊経緯

2001年9月11日	
8:46	第1ビル(110階建て)の94階と98階の間に旅客機が激突
9:03	第2ビル(110階建て)の78階と84階の間に旅客機が激突
9:59	第2ビルが崩壊
10:28	第1ビルが崩壊
17:20	旅客機が衝突していない第7ビル(47階建て)が崩壊

「9.11テロ疑惑国会追及——オバマ米国は変わるか」(藤田幸久編著)など参考

9・11テロで「崩壊」したニューヨーク世界貿易センター(WTC)の高層ビルは、全部で3棟あったことをご存じだろうか。

2001年9月11日午前8時46分、アメリカン航空11便が、WTC第1ビル94階と98階の間に激突した。その17分後、ユナイテッド航空175便が、第2ビルに突っ込んだ。二つのビルは、わずか1時間ほどの後、相次いで崩れ落ちた。

さらに約7時間後、二つ

のビル近くにあった「第7ビル」も崩壊していたのだ。ツインタワーから飛び散った残骸による火災が長時間続いていたとはいえず、旅客機が衝突していないにもかかわらず、である。ちなみに、この「第3のビル」崩壊の事実は、日本では「火災による崩壊」と小さく報じられただけだった。

この「第7ビル」の事実ひとつとっても、WTC崩壊には不可思議なことが多く、アメリカの連邦緊急事態管理庁(FEMA)が02年に出した報告書によると、ツインタワーは、突っ込んだ旅客機のジェット燃料が広範囲に広がり、そのために生じた火災がコア構造の耐性を劣化させて崩壊につながったとされた。

だが専門家たちの間では、「旅客機の衝突→火災→崩壊」という公式見解とは異

なる説が語られている。昨年12月に来日した建築家のリチャード・ゲイジ氏も、公式見解に異を唱えている専門家のひとりだ。各地で講演を行い、日本でもその内容をまとめたDVD(※1)が1月19日に発売される。

本誌の取材に、ゲイジ氏はこう明言した。

「私たちは科学的な確たる証拠で確認をしました。その証拠は、WTCのビル崩壊が爆発物を使った制御解体だったことを示していたのです」

制御解体とは、ビルなどの建築物を解体させるときに用いられ、タイミングを綿密に計算して、建物内部で爆発物が使われる。

崩壊時の映像や目撃者の証言、専門家の意見などを集めて詳しく調べたゲイジ氏によると、三つのビルが崩壊した過程で、爆破解体

あの日を境に、世界は変わった。だが約3千人の命を奪い、その後の対テロ戦争へとアメリカを突き進ませるきっかけとなったあの日、いったい何が起きたのかは、今なお謎に満ちている。このほど来日した米国人建築家のリチャード・ゲイジ氏(54)は、崩壊したWTCビルは何者かがあらかじめ仕込んでいた爆発物によって爆破されたというのだ。

てしまったことです」

たとえば前述の第7ビルは47階建ての高層にもかかわらず、すべて崩壊するまでに約7秒しかかからなかった。本来、もつとも抵抗が大きいはずの真下に向かって、抵抗がないに等しい自由落下に近い速度でほぼ左右対称に崩れていった。そうなるためには、コアとなる支柱が各階で崩壊と同時に、タイミングよく爆破によって取り除かれていなければ無理だという。

現れている。たとえば崩壊時に粉塵と化したコンクリートによって、火砕流状の巨大な「雲」がわきあがった。こうした雲は、爆破の際によく見られるという。

また、当時現場に居合わせた消防士ら100人を超す人たちが崩壊前に爆発音を聞いたたり、閃光を見たりしたと証言していること、大きな鉄骨の破片が水平方向に150メートルから200メートル先に吹き飛ばされていたことも、爆破説を裏付ける有力な証拠という。

## 7秒で崩壊した第7ビルのなぞ

「これらはどれひとつとして、火災による崩壊では起こりえない現象です。まして、すべての特徴が同時に火災によって引き起こされたとは思えません」

さらにゲイジ氏は、崩壊したビルの基礎部分で、溶けた鋼材が見つかった点に注目している。ジェット燃料による火災では、鋼材が溶けるほどの高温に達しないからだ。

屋上の線が内側に向かって折れ曲がっているように見えるのも、爆破解体に見られる特徴という(122頁「連続写真」)。周辺への影響を最小限に抑えるため、爆破解体ではビルが内側に向かってよう、爆破のタイミングが計られる。

さらにゲイジ氏によれば、ツインタワーについても、爆破解体の主だった特徴が

インターネット上の科学論

文誌に掲載された、アメリカの科学者らによる、ある論文の存在を口にした。「論文は、グラウンド・ゼロ近くの4カ所から採取された粉塵のサンプルから検出された特殊な物質について書かれています。サンプルの中に、軍事用の爆発物に用いられる、テルミット系の使用をうかがわせる成分が含まれていたのです」もともと、火災が引き金になる崩壊でも、爆発音が

起きたり鉄片が水平方向に大きく飛ばされたりすることがあり、またコンクリートが粉塵になるほど砕けることも十分に起こりうるなどとして、爆破解体説に懐疑的な見方もある。

あると思われる」などとして、アメリカの公式見解を紹介するにとどまっている。

その結果、建物全体に旅客機衝突による衝撃波が瞬時に伝わったことで柱・梁の接合部が破断し、「スプリングバック」と呼ばれる現象が起きていた可能性があるとわかったという。

**旅客機の衝撃が崩壊生んだ説も**  
日本建築学会は03年にWTCビル崩壊に関する報告書をまとめたが、火災による崩壊のシナリオについて、「詳細な解析をする上で未解明な部分が多く」  
「確定的な議論ができる段階にはなく、様々な異論が

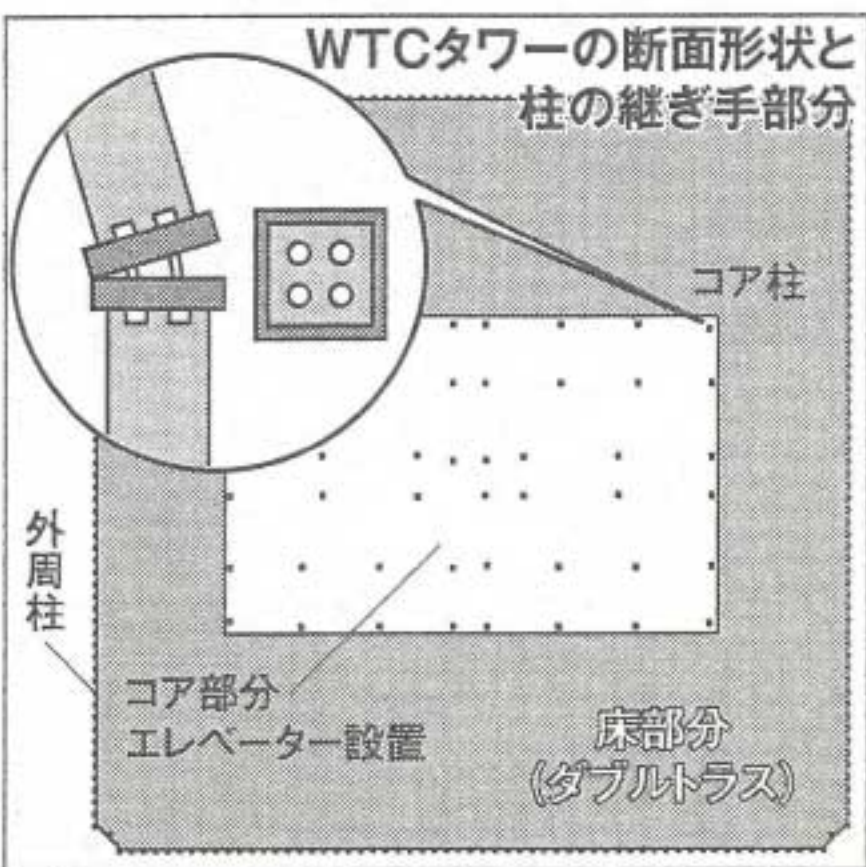
筑波大学大学院システム情報工学研究科の磯部大吾准教授(44)らの研究グループは07年、独自に開発した数値解析手法を使って、火災のみを崩壊原因としたアメリカ当局とは違う見解を発表した。

「上から押さえつけていた荷重が外れて瞬時になくなることで、柱がばねのように伸び上がる現象のことだ。110階建てのビルは、建物全体を貫く47本のコア柱(背骨)があり、そこに各階の床を支えるダブルトラス(二重梁)が接合されていた(上図参照)。

### 猛烈な爆発、対称性、粉末化、残骸の水平方向への噴出…WTCビル「爆破解体説」の根拠

- ▽本来ならもっとも抵抗が大きかったはずの場所をほぼ自由落下に近い高速で崩壊
- ▽旅客機による損傷は非対称なのに、ほぼ対称形を保って崩壊
- ▽火砕流状の巨大な粉塵の雲が発生
- ▽100人を越す証言者が爆発音と閃光を目撃
- ▽9万トンものコンクリートや金属の床材などが粉塵化
- ▽膨大な鉄骨の破片が、200メートル先まで水平方向に吹き飛ばされた
- ▽3つの高層ビルすべてで、基礎部分に大量の融解した鉄が見つかった
- ▽鉄骨や粉塵のサンプルから、テルミット系の火薬使用を示唆する証拠が見つかった
- ▽旅客機が激突してもいないのに崩壊(第7ビル)

ほぼ真下に7秒ほどで崩壊した第7ビル



「なぜあんなにすごいスピードで、まるで砂の城が崩れるようにビルが崩壊してしまったのか、私たちがすごく不思議でした。あそこまで見事に壊れたのには、火災以外にも別の理由があるのではないかと考えました」

「普段、柱には建物の自重で非常に大きな圧縮力がかかっています。ところがこの状態から急に解き放たれたため、それまでかかっていたのと同程度の引張り力が逆方向に加わり、柱が伸び上がってしまった可能性があります。私たちの計算では、衝突直後、60階付近の柱は0.2秒の間に

25秒の上下動があったと計算されました。われわれ専門家でも想像を絶するぐらい

この大きなスプリングバックだったことになり、これは、旅客機が衝突し

た場所より下の階で、激しい突き上げによっていすから振り落とされたといった

証言とも合致するという。さらに、地震の多い日本ほど設計基準が厳しくないため、WTCの接合部は日本の高層建築に比べればもろかったという。

「現場に残された破片などがすみやかに撤去されて、そもそも原因解明に必要な証拠が残されていなかったことが、様々な疑惑を生む結果になっている」

## 「公式説明は説得力を欠く」

藤田幸久  
民主党参議院議員

私は物理、化学系の素人ですが、今回来日されたりチャド・ゲイジさんの話をうかがって、制御解体に極めて近い現象で建物が崩壊したという説には、非常に説得力があると感じました。

事ではなく、日本も当事者なのです」  
小泉純一郎元首相をはじめ政府は当時、盛んにそう言うアメリカの対テロ戦争を支持し、自衛隊によるインド洋での給油活動を推し進めました。

ルを張られますが、私は再調査が必要だと言っているだけで、陰謀とは一言も言っていない。



47階建ての超高層である第7ビルが、大した火災でもないのに、まるで歌舞伎のせり舞台が沈むようにスーッと崩れた。ツインタワーが飛行機の衝突と火災だけで崩壊したというのも、説得力を欠きます。アメリカの公式報告書には十分な説明がないわけですから、再調査をするべきだと思います。

しかし、そのテロとの戦いの原点があまりにも解明されていません。一昨年、私の質問に対し福田首相は、「テロは犯罪だ」と答弁しました。

24人も犠牲者がいるにもかかわらず、これまで日本政府は遺族に対して情報開示なり報告なり、十分なケアをしてきませんでした。新政権になって、テロの被害者支援策として何ができるか、打ち合わせを始めています。再調査は基本的にアメリカ政府や議会がすべきことですが、日本としても、対テロ戦争の検証作業の一環として、9・11の再検証が必要です。

これら9・11にまつわる疑問について、私は08年1月の参院外交防衛委員会などで当時の福田康夫首相らにただしました。

犯罪ならば犯人を突き止め、訴追しなければいけない。しかし、米連邦捜査局(FBI)はいまもオサマ・ビンラディンを9・11の犯人と特定していません。FBIのホームページを見ても、それより前に起きた、ケニアヤタンザニアでの爆破事件に言及しているだけです。要するに、エビデンス(証拠)がない。

ふじた・ゆきひさ 1950年生まれ。衆院議員(2期)を経て、07年から参院議員。国会でのテロに関する質問が翻訳されて動画配信され、海外で話題になった

「テロとの戦いは決して他人犠牲になっていきます。」

こういふ話をする、すぐに「陰謀論者」というレッテル

「現場に残された破片などがすみやかに撤去されて、そもそも原因解明に必要な証拠が残されていなかったことが、様々な疑惑を生む結果になっている」

「私たちに論はありません。あるのは証拠だけです。私たちは大切な家族を失った遺族の前に探し出した証拠を提示します。それによって、罪を犯した責任者が明らかになるでしょう」

真相究明が待たれる。  
本誌・佐藤秀男、堀井正明